



追悼 故下村彦一名誉教授

下村彦一先生は、平成七年四月十八日、ご家族に見守られながら、九十四歳の天寿を全うされました。

先生は、明治三十三年五月十七日のお生まれで、大正十四年三月に東京帝国大学理学部地理学科を卒業し、同大学の副手を経て、大正十五年一月に広島高等師範学校に教授として赴任されました。昭和三十九年三月に広島大学を停年でご退官なさるまで、三十九年の長きにわたって、広島の地で地理学の発展と地理教育のために力を尽くしてこられました。

この間、原爆で焦土と化した広島大学に文学部地理学教室を創設され、多くの地理学徒を世に送り出されました。また、文学部長もお務めになり、その折には、理学博士が文学部長になつたと新聞が伝え、しばし話題になつたことを思い出します。

広島大学在職中、日本学術会議の委嘱をうけ、国際地理学会議組織委員および文部省学術奨励審議会委員などを務められるとともに、広島地理学会を創設しその会長の職につかれ、地理学の発展に多大なご尽力をなされました。

先生は、自然地理学、特に地形学の研究において独自の学風を樹立し、多くの業績をあげられ、わが国の地理学の向上に貢献されました。なかでも、日本群島の地形区をはじめとする地形区分の研究、中国山地における河川争奪地形の研究、瀬戸内海の海岸地形の研究等で先鞭をつけられるとともに、桜島を中心とする火山地形の研究を大成され、学界に大きく寄与されました。このようなご業績により、昭和四十六年に勲三等旭日中綬章を受章されました。

教室創設者の先生が名誉教授としてご健在であられることが、我々教え子の励みでありました。このたび、先生をお別れすることはまことに悲しいことです。心からの感謝の念を捧げ、謹んでご冥福をお祈りいたします。

医学部自然地理学・地域学講座

中田 高（なかた・たかし）



哀悼 大鷹英子先生

大鷹英子先生は、昭和九年六月二日、長崎県にお生まれになりました。三十一年三月名古屋大学理学部を卒業、三十四年四月名古屋大学助手、同年広島大学原爆放射能医学研究所助手、四十五年助教授を経て、五十七年四月教授に就任されました。

この間、先生は、長年にわたって、高潔な人格・該博な学識をもつて、研究並びに教育に努められ、生化学、分子生物学、分子遺伝学さらには分子進化学の幅広い学問分野において多大の優れた業績をあげられたとともに、多数の優秀な人材を育成されました。先生は、世界に先駆けて、大腸菌リボソーム生合成の研究、酵母リボソーム蛋白質の分離・精製と構造決定を行われ、広島大学における分子生物学、分子遺伝学の基礎を築かれました。また、世界で初めて古細菌(*Archaeabacteria*)のリボソーム蛋白質遺伝子のクローニングに成功し、古細菌の進化的位置解析に貢献され、その後さらに全生物種のリボソーム蛋白質一次構造の進化的解析およびその集大成、リボソーム蛋白質の特異的分子機構の解析、リボソーム生合成の調節機構の解析など、幅広い研究を行われました。

大学内においては、広島大学国際交流委員会、自己点検・評価委員会委員および海外広報専門委員、DNA実験安全委員会および同専門委員、遺伝子実験施設運営委員、附属図書館運営委員、および医学分館運営委員等を長期間にわたり歴任され、大学の国際化、分子生物学、分子遺伝学の発展、DNA実験上の安全管理および運営並びに図書の収集など広島大学の学術的発展にも大きく寄与されました。

研究所内においては放射線安全委員会、自己点検・評価委員会委員として所内の教育研究活動における自己点検に尽力されることとともに、医学系研究科の自己点検・評価にも参画され、その検討母体である医学部自己点検・評価委員会でも積極的な活動を開催されました。

このように、精力的に活動を続けてこられた先生ですが、平成五年の秋頃から、体の不調を訴えられて精査のため本学医学部附属病院(原医研外科)に入院、腫瘍摘出手術を受けられて一時退院、その後入院をくり返されながら一年有余の間、ご自身の病名をご承知の上で研究や教授会出席などの業務を遂行され、最後まで、気丈にかつ威厳に満ちた態度で闘病生活を送られましたが、平成七年四月五日、ついに永眠されました。お亡くなりになつた当日の朝は、はつきりとした意識のもとで外科の峰教授とお礼の握手を交わされた由でした。

このような先生を失うことは、原医研にとってはかりしれぬ痛手ですが、これまでに残された業績、示された道筋、話されたお言葉、および先生の面影は、われわれの記憶とともに永遠に生き続けることあります。

ここに改めて哀悼の意を表し、先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

原爆放射能医学研究所環境変異研究分野 佐藤幸男（さとう・ゆきお）



渡邊優子事務官のご冥福を

医学部附属病院薬剤部 渡邊優子事務官は、去る三月三十一日逝去されました。享年五十歳。

今年の二月、再入院される前にお会いした時「四月より復職するつもりです。よろしくお願ひしますね」と言われ、喜んでいた矢先のことでした。

彼女は、昭和三十九年に薬剤部事務官としてこちらに、当初は調剤室で処方箋の事務処理を中心に仕事を行い、昭和五十三年より薬品管理室に配属され、以後、今日に至るまで大学病院で使用される医薬品・試薬等全てを一手に購入・払い出しの事務業務を引き受け、かなりハードな仕事を行っていました。薬剤部も、患者の増加に伴い、患者待ち時間が長くなるなどサービス等の低下をきたし、各部所ともに昼食が定時に摂れない状況が続き、日常会話では「お互い身体だけは気をつけよう」が挨拶のようになっていました。

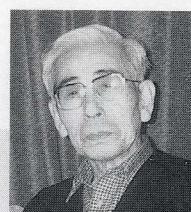
このような状況下で、彼女は気分転換にと「ちぎり絵」を始められ、その作品はすばらしく、「霞文化祭」等に展出され、皆様より高い評価を得ておられました。絵の話をするときの彼女の和やかな顔を思い出します。

こんなに急いで逝つてしまわれるとは…返す返すも残念でなりません。

薬剤部一同、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

医学部附属病院薬剤部

向井 良（むかい・りょう）



名譽教授 伊東隆夫先生のご逝去を悼む

伊東隆夫先生は、四月三日、八十三歳で逝去されました。

数年前に大病で倒れましたが、その後回復され、お元気になられて、学会などでもお目にかかることがあります。けに、いまだに信じられない思いです。

先生は、広島文理科大学史学科東洋史学専攻を卒業後、海軍兵学校教授、広島文理科大学講師などを経て昭和二十八年に文学部に着任され、昭和五十年に退官されるまでの間、二十二年間の長きにわたって文学部で研究と教育にあたられました。またこの間、附属図書館長をはじめとする学内の要職を歴任され、大学・学部の管理運営にも多大の貢献をされました。

先生はその卓抜な語学力によって、主として東西交渉史、中国及び東南アジアの文化史の研究を専門にされました。とりわけ、アジアにおけるキリスト教史の研究では大きな成果を上げられました。加えて、昭和四十四年には広島大学アフガニスタン調査団団長として調査を総括され、この地域に関する研究を進められるなどその幅広い学識で学界をリードされました。また、広島史学研究会理事長、日本歴史学協会委員などを長年務められ、歴史学の発展に尽くされました。広島大学ご退官後も、広島史学研究会大会や東南アジア史学会にはよくおいでになり、我々後学の研究発表をいかにも楽ししそうに聴いておられたことが、今も目に浮かびます。あのにこやかなお顔をもう二度と拝見できないことはたいへん悲しいことですが、先生のご冥福を心からお祈りする次第です。

文学部アジア史講座

植村泰夫（うえむら・やすお）